

ラグビー校の忘れられない思い出

近藤 節夫(三二回生)

昭和五七年の晩秋、ある海外教育事情視察団にお供して、ラグビー発祥の地、イギリスのラグビー市(バーミンガムの東四五km)を訪れた。当地の教育機関と公立学校でイギリスの教育制度を見学、研修するというのが主たる目的で、ラグビーフットボールや、ラグビー誕生校であるラグビースクール(ラグビー校)や、最初にボールを抱えて走ったウイリアム・ウエブ・エリス少年のエピソードなど事前の研修では、話題にも上らなかった。

しかし、出発の日が近づくにつれ、一部の参加者からせっかくラグビーを訪れるのなら、紳士のスポーツ・ラグビーを生み、イギリスでも屈指の伝統校であるラグビー校を見学したいという強い要望が持ち上がってきた。ラグビー市とラグビー校は、私にとってラグビーを始めた時から、ノスタルジアを抱いていた望郷の地・憧れの学校である。将に望むところ、と秘かにロンドンにいる友人を通して、なんとかラグビー校見学の許可をもらい、訪問を旅程上に組み込めないかと相談してみた。

半月後、然る友人からラグビー校訪問承諾のうれしい書状を受け取った。幸いにして最終日のスケジュールにラグビー校見学を組み入れることができたのである。ラグビー校は、同じ伝統校であるハロー校や、イートン、ウインチェスター校と並び称せられるイギリスの名門パブリックスクール(一五六七年創立)で、オックスフォードやケンブリッジを含む一流大学への進学率も高い。ラグビー市教育庁といくつかの訪問校でイギリスの教育制度のオリエンテーション、イギリスの将来像、こどもの教育に何を期待するか、等さんざん堅い話を聞かされた後に、締めくくりに視察団最大の期待と楽しみが待っていた。

特別訪問校であるラグビー校へは、エリス少年も走り回ったであろう、見事な芝のラグビーグラウンドを感慨の想いで歩いて訪れた。私たちはハリー・ポッター風の制服を着た生徒たちと教職員に温かく迎えられた。薦が絡まり古色蒼然として、重厚な雰囲気の漂う広い講堂で、私たちはあごひげを蓄えた校長先生から、伝統的なイギリスの教育制度とラグビー校の歴史について総括的なレクチャーを受けた。

彼らの胸の内には、自分たちの学校教育に対する誇りや、過剰なまでの自信がみなぎっている。それは取りも直さず、過去の卒業生たちの赫々たる業績に対する尊敬の念と、独自の教育が外部の権力や一部の中傷にも屈しなかったという、強い信念とプライドがあったからである。実際自分たちが実践した教育と教育方針は、四百年以上に亘って継承され間違っていないかった、と得意満面で語った校長の、あのひげ面はいまも忘れられない。

私はエリス少年の銅像の前を軽くジョッキングしながら、何か永年の念願を果たしたような、晴れ晴れした気分ですぐ宿先へ戻った。

その夕べラグビー滞在最後のレセプションには、ラグビー校からも多くの先生方が出席された。彼らのほとんどがラグビー経験者で、楕円形のボールを手縫いで製作する職人も

招かれた。私は日本からの視察団の教育関係者を差し置いて、「ラグビー経験者」というだけの理由で、黒子の立場から表に出させられ、記念品にミニチュアボールまでいただいてしまった。イギリス人のラグビーに対する恋心にも似た想いと情熱は、人並みではない。驚いたことに、ラグビーは楽しい、ラグビーは真の男のスポーツだ、などと当たり前のことを言っているうちはまだいい。アルコールの勢いもあってラグビーの実践的効果と教育効果について静かに話し合っていた、ラグビー本場の教育関係者がやがて、「ラグビーをやった男は心身ともにタフだ」とか、「ラグビーは国際親善のパスポート」「ラグーマンは家庭円満人で、離婚はない」「ラグビーこそ上流階級、インテリが嗜むスポーツで、サッカーなんか労働者のスポーツだ」などとハイテンションに盛り上がってしまう。大の男たち誰も彼もが仲間や、私たちゲストまで巻き込んで口角泡を飛ばし、談論風発するくだけぶりである。熱気を帯びた話が次第に脱線して、ついには一緒に肩を組み、輪になって深夜まで放歌高吟する様子には、イギリスの、またラグビー市民のラグビーに対する理屈抜きの愛情、そしてラグビーを通じた連帯感を改めて強く呼び覚まされた。

それにしてもふた昔以上も古い話であるが、ラグビーへ想いを馳せるとつい昨日のことのように、ラグビー市訪問で出会ったラグーマン、一人ひとりの笑顔と、街じゅうに緑のグラウンドが点在する、絶好のラグビー環境が鮮やかに甦ってくる。ラグビーを半世紀前にプレイしたことが、凶らずも私の人生にたくましい生きがいと彩を添えてくれたことは間違いない。いまでもラグビーに想いを巡らせるひとときこそ、「至福のとき」と言えるのではないかと思っている。